

負担度の異なる依頼場面における日本語母語話者とロシア語母語話者の認識と表現ストラテジー： ポライトネスの観点から

藤井紀子¹ 木山幸子²

¹ 東北大学文学部言語学研究室, ² 東北大学大学院文学研究科言語学研究室

norikofujii0921@gmail.com, skiyama@tohoku.ac.jp

1 はじめに

異文化間交流の場面においては、円滑にコミュニケーションを進めるために、両文化での適切な振る舞いや独特な言語表現などに関する知識、中でも対人配慮に対する認識は重要であるが、これまでに日本語とロシア語の依頼表現のポライトネスを比較対照した研究はほぼない。依頼表現について談話完成テスト（以下 DCT）を用いて英語やドイツ語といった西欧文化と、ポーランド語やロシア語といったスラヴ文化で比較した Ogierman (2009) は、表現の直接性はスラヴ文化においてより高いことを示した。その一方で、ロシア語においては慣習化された間接的な依頼表現を選択する傾向があることも報告されており、状況に応じて用いられる表現ストラテジーの直接性が異なるはずである。本研究では、依頼の状況を 10 場面設定した DCT を行い、それぞれの依頼内容に感じる心的負担の度合いに応じて表現ストラテジーの選択がどのように異なるか、日本語とロシア語で比較検討することにした。

Brown & Levinson (1987) の対人配慮（ポライトネス）の理論によれば、人間の「自分の行動を他者から邪魔されたくない欲求」としてのネガティブ・フェイスと、「自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしい欲求」としてのポジティブ・フェイスの 2 つの側面に配慮して、対人関係（距離や力関係）とその内容の負担度に応じて適切な言語表現を選択することが求められるという。

ロシア語の言語行動の特徴を考察した Larina

(2009)、日本と中国のポライトネスの特徴を研究した邵 (2015)、英語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語、日本語に関してキーワードによる異文化理解について考察したヴィエルジュビツカ (2009) に基づいて以下の仮説を設定した。

- ・負担度の捉え方はロシア語で低く、日本語で高くなる。
- ・ネガティブ・フェイスに配慮した表現（ネガティブ・ポライトネス）はロシア語より日本語の方で多く使用される。
- ・ロシア語より日本語の方が多様な表現ストラテジーを用いる。

2 方法

2.1 回答者

20 代の日本語母語話者とロシア語母語話者が調査に回答した。日本語母語話者は 28 名（男性 16 名、女性 12 名）、ロシア語母語話者は 38 名（男性 9 名、女性 29 名）であった。ロシア語母語話者の回答については、無効回答を除外して 28 名（男性 7 名、女性 21 名）の回答を分析に用いた。

2.2 手続き

表 1 の通り多様な負担度で 10 種の依頼場面を作成し、日本語版とロシア語版を用意してオンラインで調査を実施した。回答者は、状況説明文を読み、自分がその状況におかれた場合何と言うか想定して自然な話し言葉で自由に記述するよう求められた。また各場面の依頼内容が聞き手にとってどの程度負担になると思うかを 5 段階（1：あまり負担にならない、5：とても負担になる）で評価するよう求められた。負担度

表 1. 10 種の依頼場面

場面 1	バスの運賃を払うとき小銭を持っていないため借りる
場面 2	ドライブに行くため、友人が持っている車を一日借りる
場面 3	友人と一緒に行く予定だった好きなアーティストのライブに用事ができて行けなくなり、グッズを買ってきてもらう
場面 4	今週支払い期限のアパートの家賃 5 万円を払えないためお金を借りる
場面 5	家の鍵を忘れて外出し、翌日まで家に入れないため一晩泊めてもらう
場面 6	所属するボランティア団体で行っている募金活動で一口 1000 円の募金をお願いする
場面 7	財布を忘れ、レストランで食事代 3000 円を立て替えてもらう
場面 8	体調不良で欠席した講義のノートを借りる
場面 9	一週間の旅行の間飼っているネコを預かってもらう
場面 10	友人との共通の知り合いの A さんとなかなか会う機会がなく、A さんに渡したい小包を今度 A さんと会う友人に託す

に焦点を当てて分析を行うため、場面の対人関係は固定し、すべて同性の親しい友人とした。

2.3 依頼発話の分類

DCT で得た依頼発話の分類は、基本的には Blum-Kulka, et al. (1984) で提唱されたコーディングスキームに従った。それに加えて、Ogiermann (2009) のロシア語データの分類法を、本研究のデータにあわせ適宜調整した。まず、すべての依頼発話を (a) Address Term(s) (呼称)、(b) Head act (依頼行為の主要部)、(c) Adjunct(s) to Head act (付加部) の 3 部に区分した。次に、主要部を 9 種の

ストラテジーに分類するとともに、主要部内の修飾要素を 5 種類の downgraders と 2 種類の upgraders に分類した。付加部は、Brown & Levinson (1987) の記述に基づいてポジティブ・ポライトネスかネガティブ・ポライトネスであるかに分けた。

2.4 分析

第一に、依頼場面の負担度の評定について回答者の性別と母語による違いを検討するために Analysis of Variance (ANOVA) を行った。第二に、DCT の自由記述データの分類結果の生起パターンの多様性を検討するために、主要部のストラテジーと修飾要素のエントロピーを算出した。また、各言語で選好されるポライトネスの傾向を検討するために、付加部の出現回数に対して、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスのそれぞれの割合を算出し、日本語とロシア語の間で対応のない t 検定を行った。第三に、回答者の負担度に対する認識と、その認識の結果として選択される依頼表現との関係性を検討するため、上述の 4 つの要素と負担度の平均値を合わせた 5 つの要素について、相関分析を行った。分析には R version 3.5.1 (The R Foundation) を使用した。

3. 結果

依頼内容の負担度の ANOVA の結果、全体 ($F(1, 556) = 20.71, p < 0.00$)、場面 4 ($F(1, 52) = 8.490, p < 0.01$)、場面 5 ($F(1, 52) = 11.55, p < 0.01$)、場面 7 ($F(1, 52) = 11.19, p < 0.01$)、場面 8 ($F(1, 52) = 4.486, p < 0.05$)、場面 9 ($F(1, 52) = 5.471, p < 0.05$) において母語の主効果が有意であり、日本語母語話者がロシア語母語話者より依頼内容の負担度を高く認識していることが示された。場面 6 では性別と母語の交互作用が有意 ($F(1, 52) = 4.30, p < 0.05$) であり、ロシア語を母語とする男性と日本語を母語とする女性がよ

り負担度を高く認識していた。

t 検定の結果、主要部のストラテジーのエントロピーの差が有意傾向を示し ($t(17.93) = -2.09, p = 0.05$)、日本語のほうが多様なストラテジーを用いる傾向があるようであった。

相関分析の結果、日本語では負担度と付加部のポジティブ・ポライトネスの間に負の相関 ($r = -0.69, p < 0.05$)、負担度が低い場合にポジティブ・ポライトネスが用いられやすいことを示した。反対に負担度と付加部のネガティブ・ポライトネスの間に正の相関が見られた ($r = 0.61, p = 0.06$)。一方、ロシア語では負担度と主要部の修飾要素の間に正の相関 ($r = 0.55, p = 0.10$) が認められた。

4 考察

依頼内容の負担度の ANOVA 分析の結果、明らかに日本語母語話者の方がロシア語母語話者より依頼内容が聞き手に与える負担の度合いを高く捉えていることが認められ、日本語ではロシア語より負担の度合いが高くなるという仮説が支持された。一方、性別と母語の交互作用が現れた場面 6 は、10 場面の中で唯一ロシア語母語話者が日本語母語話者より平均が高い項目であった。ロシア人にとっては、大学のボランティア団体で募金活動をするという状況が身近で

はなく、負担度を想像するのが難しかったという可能性が考えられる。

依頼表現のあり方についての t 検定の結果からは、日本語とロシア語では、依頼表現のうち、主要部のストラテジー使用パターンに最も顕著な違いが認められた。日本語における主要部の依頼ストラテジーのエントロピーはロシア語より大きく、日本語の方が多様なストラテジーを用いて依頼が相手に及ぼし得る力を和らげる傾向が見られた。日本語ではロシア語より多様なストラテジーを使用するという仮説は、部分的に支持されたと言える。

相関分析の結果は、日本語母語話者は、依頼内容の負担度の認識が高くなるほど、ポジティブ・ポライトネスに沿った付加部の使用が少なくなり、ネガティブ・ポライトネスに沿った付加部を多く使用するようになるということを示し、日本語ではネガティブ・ポライトネスの使用が多くなるという仮説を支持した。一方、ロシア語母語話者については、負担度の認識が高くなるほど主要部内部の修飾の要素を多様使用するようになるということが示された。依頼主要部そのものの表現パターンは比較的決まったパターンに沿いながら、その分を修飾的な要素で多様性を出しているのかもしれない。

さらに、日本語とロシア語の依頼表現におけ

表 2 各種ストラテジーの相関

測定項目	1	2	3	4	5
1 負担度 (主観による 5 段階評定値)	—	0.46	0.55 †	-0.15	0.15
2 主要部ストラテジーのエントロピー	0.25	—	0.01	-0.29	0.29
3 主要部修飾要素のエントロピー	0.44	0.33	—	0.25	-0.25
4 付加部のポジティブポライトネスの使用割合	-0.69 *	-0.4	-0.03	—	-1.00***
5 付加部のネガティブポライトネスの使用割合	0.61 †	0.17	-0.14	-0.92	—

※ロシア語の相関は対角線の右上、日本語の相関は対角線の左下に示している。

※相関係数の検定による p 値について 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '†' 0.1 で表示している。

る顕著な違いは、付加部で用いられるストラテジーに見られた。日本語ではポジティブ・ポライトネスとしての感謝の表明（例「休んだ時のノート見せてもらってもいい？ありがとう！」[場面 8]）が全体で合計 2 回しか出現しなかったのに対し、ロシア語では合計 19 回（例 ”можешь мне помочь с квартплатой? Буду очень благодарна.” 「家賃のことで助けてもらえる？とても感謝するよ。」[場面 4]）出現した。一方、ネガティブ・ポライトネスに相当する謝罪表現はロシア語では全体で一度も出現しなかったのに対し、日本語では合計 12 回（例「5 万円貸してくれないかな。ごめんね。」[場面 4]）使用された。この対比から、依頼を行うとき、ロシア語では感謝表現を、日本語では謝罪表現をストラテジーとして特徴的に用いる傾向があると考えられる。

さらに、日本語母語話者とロシア語母語話者とが明らかに異なる点は、依頼を行うかどうかの判断である。日本語母語話者は回答者 28 人全員がすべての場面で必ず何らかの依頼の発話を記入したのに対し、ロシア語母語話者は、そもそも依頼を行わないことを選択するという結果も多く見られた。理由として「お金の貸し借りは礼儀正しくないのですこのような願いはできない」「友人に迷惑をかけるのでこのような状況はありえない」などが挙げられた。負担度 NO 認識の結果からは、依頼という発話行為を日本語母語話者ほど聞き手への脅威と捉えていないことがうかがえたが、ある状況が発生したとき、それが友人に依頼してよいことなのかどうかという問題に関しては、ロシア語母語話者は日本語母語話者よりも慎重に考慮し、親しい友人に対する接し方を明確に決めているのかもしれない。

本研究では、これまであまり対照研究がなさ

れていなかった日本語とロシア語の依頼表現について量的な分析を行い、いくつかの特徴を見出すことができた。今回は負担度に焦点を当て、対人関係を固定して調査したが、今後は、話し手と聞き手の力関係や社会的距離を変数として同様の実験を行うことで、日本語とロシア語のポライトネスについてより詳細に特徴が見出せる可能性がある。

引用文献

- アンナ・ヴィエルジュビツカ (2009) 『キーワードによる異文化理解: 英語, ロシア語, ポーランド語, 日本語の場合』 東京: 而立書房
- Blum-Kulka, Shoshana, Olshtain, Elite (1984) Requests and apologies: a cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics* 5 (3): 196–213.
- Ларина, Татьяна, В (2009) *Категория вежливости и стиль коммуникации: Сопоставление английских и русских лингво-культурных традиций*. [Category of politeness and communication style: Comparison of Russian and English linguacultural traditions]. Москва: Рукописные Памятники Древней Руси.
- Ogiermann, Eva (2009) Politeness and in-directness across cultures: A comparison of English, German, Polish and Russian requests. *Journal of Politeness Research* 5(2): 189-216.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (ペネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン, 田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 東京: 研究社)
- 邵俊倩 (2015) 「ポライトネスにおける日中対照研究—依頼表現を中心に—」 『岩大語文』 20:43-51.